The Reminiscence of Exellia NG+1

傾く世界で

作成レギュレーション

基本概要

·経験点:30500点(新規)、34500点(継続)

·資金:39000G(新規)、45000G(継続)

· 名誉点: 800 点(新規)、1000 点(継続)

· 成長回数: 64 回

各種制限について

- ・ヴァグランツ禁止
- · 蛮族 PC 禁止
- ・ソード・ワールド 2.0/2.5 標準流派への入門、及び秘伝の習得・使用の禁止
- · 武器防具強化禁止
- ・《防具習熟 A/盾》《防具習熟 S/盾》の削除、及び装備可能ジョブの制限
- ・レベル制限 5~6
- ・成長回数が10以上のときに、その成長回数の60%以上の偏重割り振り(極振り)禁止

動画用の参考資料

旧来派の兵士

立ち絵:画像なし

読み上げ音声: AquesTalk1

船頭のデヴィッド

立ち絵:種族=リルドラケン/性別=男/クラス・ジョブ=戦士/装備=テオゴニアー・ディフェンダー。鱗の色は赤で瞳の色は青(ムフェト・ジーヴァを人型にしたような姿)

読み上げ音声: VOICEVOX「雀松朱司」

ジェシカ・サージェント・ナインテールズ

立ち絵:種族=エルフ/性別=女、クラス・ジョブ=学者(武器構え差分なし)、装備=エデンモーン・ヒーラー。髪の色は白で瞳の色は銀(完全な白ではない)

読み上げ音声:未定

鍛冶師のアンドレイ

立ち絵:ダクソ3の「アンドレイ」に準拠。ただし、あそこまで身長は高くない(種

族:ドワーフ)。

読み上げ音声:未定

物売りのエミリア

立ち絵:種族=グラスランナー/性別=女(書籍「ALL グララン総進撃!」における PC「ゾーラ」と髪色・髪型は同じ)/装備=ゾーモー・キャスター

読み上げ音声:未定

スチュアート・スミス

立ち絵:種族=エルフ(漆黒編までのアルフィノとほぼ同じ立ち絵)

読み上げ音声:未定

導入

"龍姫公"による、『超える力』の能力者への迫害政策は、"最果ての聖王"との一騎討ちの結果、"龍姫公"が敗れたことで終焉を迎えた。

だが、それまでに生じた傷が癒えるわけではない。

結局のところ、この行為の善悪を決めるのは、事象の後に生きる者達だ。この時代を生きる者達が、客観的に決められることではない。

その事件から5年後。

政治的な機能は未だフレイディアにあるが、そこは政府高官たちによる論議の場でしかなく…実態は、アゼルマレム地方北西部の市場都市、ナリューファ市場街から通じる川を下った先…魔物さえ寄りつかない禁域に造られた『隠れ家』にあった。

今となっては、フレイディアにある《暗魂の暁》については倉庫のような状態になって おり、その主要機能は『隠れ家』にあるという。

フレイディアの政体変化。

これによって始まる変革の風は、まだ吹き始めたばかりだ。

<hr>

エクセリアは、トルガワ港の議事堂跡に、旧来派によって囚われた『超える力』の能力者を救出するため、刃を向けられる能力者の前に立って出た。

エクセリア

「この光と炎に灼かれたい奴はどいつだ?」

旧来派の兵士

「まさか…!」

「本物…!」

「<ruby>宙準星の巫女<rt>コズミック・クェーサー・メイデン</ruby>だ!」

この戦闘ではエクセリアを操作して戦闘します。

敵:オールドエステバリッシュド・ソルジャー×7

戦闘が落ち着き、残敵が逃げ去った頃。

能力者のひとりが、エクセリアの顔を見るや否や、唾を地面に吐き捨てた。

虐待されていた能力者

「お前のせいで、これまで何人の仲間が死んだと思ってる。分かるか。餌だぞ、餌! 関係のない俺達が、餌に使われたんだ!お前をおびき寄せるためだけに!」 「どういうつもりなのよ!私達は見つからないよう、静かに暮らしてきた!それを、あん たたちがちょっかい出すせいで…!」

少しばかりの紛糾の後、エクセリアは物怖じせず答えを出す。

エクセリア

「今の今まで、旧来派の連中がやってきたことは、その通りだ。 奴等を諫められなかったことを謝罪したい。…すまなかった」

多くの能力者が、エクセリアの急進的な行動に憤り、立ち去る中、老年の能力者がエクセリアに訴えかけるように言葉を発した。

老年の能力者

「分かっておくれ。わしらも必死で生きとるんだ」

彼が立ち去った後、深くため息をつき、エクセリアは独りごちる。

エクセリア

「今となっては、『宙準星の巫女』の名は、何も知らない人々にとっては、大罪人の二つ名か。だが、同時に、知っている者からすれば『救世主』であり『為政者』である者の名前ときた。世知辛いものだな、この世界は」

事態の収拾をつけた後、エクセリアは『隠れ家』―――魔動機文明の遺産が未だ稼働する『冒険者ギルド《暗魂の暁》の本部』へと帰った。

エクセリア

「世界をもうひとつの未来へと導くためとはいえ、私達がやったことは、龍姫公の打倒…ある種の革命だ。暮らしを脅かしていると受け取られても仕方ない。『超える力』を持つ者を救うにしたって…その一方で、旧来派の連中のせいで彼らを苦しめてる。

彼らも、非難の目を向けずにはいられない。仕方のないことだが…終わらない死の円環 をぶち破るには、そうするしかないんだ。

『誰かに強いられることなく、己の意志で未来を選び取れ』。

それが、私の掲げる政策だ」

船頭のデヴィッド

「ほら、着いたぜ《巫女》。愛しの我が家だ」

罪人が休む『隠れ家』

魔動機文明の遺産が、今も尚稼働する『隠れ家』。

エクセリアが、そこを「《暗魂の暁》本部」にしたのには理由がある。

魔動機が未だ動き、魔物も寄りつかず、挙げ句魔法は確実に不発になる領域。

そこだからこそ、エクセリアはそこに広がる遺跡を《暗魂の暁》の本部に据えたのだ。

船頭のデヴィッド

「《巫女》、エメリーヌとあの冒険者達のところに行ってやれ。

今はサロンにいるはずだ」

エクセリア

「分かった。そうしよう」

<hr>

(%GM \times \mp : MAP σ URL = https://ho9tocraft222.chips.jp/wordpress/wp-content/uploads/2024/11/7d383761d23c5efb2d3866c593739d71.png)

君達はエメリーヌによって、サロンに集められていた。

エメリーヌ

「この面子が揃うのも、久々ね。サイモンが伝書鳩を飛ばしてきた。…状況は分かってる わよ、エクセリア。今回も災難だったわね」

エクセリア

「巷では《宙準星の巫女》は大罪人だ。そのうえ、旧来派にまで目をつけられてる。誰だって関わりたくはないだろうよ」

(※GM メモ: RP 待機)

エクセリア

「――それで、留守中に変わったことは?」

エメリーヌ

「旧来派の資金ルートを調べるために、イリヤを向かわせたわ。どうにも、彼らの動きがひっかかってね。一体どこから、『資金援助』を受けているんだ、ということで調べているのよ。今は帰りを待っているところよ」

(※GM メモ: RP 待機)

エクセリア

「…なら、イリヤが戻るまで、"彼女"と各国の情勢をさらっておくとしよう」

(※GM メモ: RP 待機)

エクセリアの視線の先には、ケルディオン大陸を描いた地図を広げている女性がいた。

エメリーヌ

「ジェシカかぁ。戦の研究さえできれば、場所は問わないといっていたけれど…、こんなところでも勉強とは、変わった先生だ」

エクセリア

「変わり者だから協力してくれるんだろう?

…それで、今日はこいつらに何をさせるつもりだ?自慢じゃないが、5年前の戦いでこいつらもかなり疲弊してる。5年も、お使い程度のことしかやっていなかったのはそのためだろう?」

(※GM メモ: RP 待機)

エメリーヌ

「君達には、この隠れ家の住人と交流を深めてもらうよ」

(※GM メモ: RP 待機)

エクセリア

「交流、か…。確かに、あたふたしていたら5年が経過していたね。君達も、『何も分からないまま』5年が過ぎたように感じているだろう」

PC への選択肢(誰と話をするか)

- ・ジェシカ・サージェント・ナインテールズ(作戦室)
- ・鍛冶師のアンドレイ(アンドレイ工房)
- ・物売りのエミリア (老婆の取引所)
- ・スチュアート・スミス(学士の私室)※

(※GM メモ:スチュアート・スミスのイベントは「ジェシカ・サージェント・ナインテールズ」の後に選択可)

ジェシカ・サージェント・ナインテールズ 君達はジェシカに話しかけた。

ジェシカ

「悪運が強いな。まだ生きているとは…」

(※GM メモ: RP 待機)

エクセリア

「お前にだけは言われたくない」

ジェシカ

「何度か暗殺されかかっただけじゃないか。騒ぐほどのことでもなかろう…。

さて、用件は何かな?この偉大なる軍事学者、ジェシカ・サージェント・ナインテール ズが答えよう I

(※GM メモ: RP 待機)

エクセリア

「ついでに、各国の情勢を把握しておきたい」

ジェシカの講義

ジェシカ

「今日も今日とて、ケルディオンは千々に乱れたまま。史上最悪の大罪人《<ruby>宙準星の巫女<rt>コズミック・クェーサー・メイデン</ruby>》の登場に、枢軸国の結託…。

だが、世界を揺るがす風は、それだけじゃない。

ディスエリィア労働者共和国という"嵐"の存在だ。

ケルディオン大陸北東に位置するディスエリィア皇国は、5年前にアレクサンドル・ウスペンスキー1世が起こした革命によって、前代未聞の思想、共産主義に移り変わった。 今は後継者のアレクサンドル・ウスペンスキー2世に国家元首の座を譲り、ディスエリィア式の共産主義をケルディオン大陸全体に流布しようとしている。

ヴァルマーレの北方領土、新関諸島を、ザインウェアとヴァルマーレの防護を強行突破 して占領したのは記憶に新しいな」

エクセリア

「今度はこちらに視線が向いているから、痛い話だ。

奴等、自分の国の平均気温が低いせいで、不凍港がないからと駄々をこねて、私達を攻撃する材料にしていたな」

(※GM メモ: RP 待機)

ジェシカ

「ザインウェア、ヴァルマーレ、新生した龍刻連邦の3カ国からなる『連合国』と、二サベベル社会共和国、マトーン連邦をはじめとする全体主義者達の集まりである『枢軸国』に加えて、ディスエリィア労働者共和国は新たな陣営『コミンテルン』を設立した。

各陣営が、生き残りを賭けて戦っていくことになる」

(※GM メモ: RP 待機)

エクセリア

「…なるほど、いい雲行きとは言えないか」

ジェシカ

「世界にとっては…な…。今後の風の吹き方ひとつで、君達にとっては、追い風になるかもしれない。

こんなところだ、エクセリア。此度の講義代は、そこの冒険者達への"お使い"で手を打とうじゃないか」

(※GM メモ: RP 待機)

エクセリア

「諦めてくれ。ジェシカはいつもこうなんだ。で、"お使い"の内容は?」 ジェシカ

「この本を、書庫の主に返しておいてくれ。《学士》によろしく」

君達は「書物《ケルディオン宗教史》」を手に入れた。

エクセリア

「それを、《学士》に届けてくれ。大広間に入って、東側の階段を昇った先に行くんだ。 間違っても、西側に行くんじゃねぇよ?そこは、私の部屋だからな!

ジェシカからのお使い

君達は、難なく「学士の私室」に辿り着くだろう。そこには、数多くの歴史書や学問に 関わる書物、宗教書などが置かれていた。

エクセリア

「―――スチュアート」

スチュアート

「…そう呼んでくれるのは君ぐらいだよ、エクセリア。《学士》と呼ばれすぎていて、ついうっかり、自分の名前を忘れそうになる。

エクセリア、無事に戻ったようで何よりだ」

(※GM メモ: RP 待機)

君達は「書物《ケルディオン宗教史》」をスチュアートに渡した。

スチュアート

「ジェシカのやつは、相変わらず読み込むのが早いな。私も、もう少し解読が早ければ、 エクセリアや君達の頼みに応えられるかもしれないけど…先日手に入れてもらった書物に も、龍姫公の出生に関わる、それらしい記録はなかった。

龍姫公の出自について、そこに秘められた秘密に辿り着くには、まだまだ時間がかかり そうだよ」

エクセリア

「謎だらけなんだな、『闇喰竜のドミナント』というものの起源は」

スチュアート

「一筋縄でいく相手ではない、ということだろうさ。

今は、ザインウェアの古文書を探っているよ。何か分かったら知らせよう」

(※GM メモ: RP 待機)

※注:RPにて「おならが臭そう」に似た発言が出た場合

アルテマ

「そこまで知識に貪欲になっているわけではないだろう…。流石に(目逸らし)」

鍛冶師のアンドレイ

君達はアンドレイに話しかけた。

エクセリア

「久しぶりだな。おおよそ4万年前以来か?」

アンドレイ

「そうかもな。最後の薪の王であるアンタの…連れか、そいつらは」

(※GM メモ: RP 待機)

アンドレイ

「俺はアンドレイ。鍛冶師をやってる。

お前さんがたはまだ手に入れていないだろうが、もし、ついうっかり、『楔石』を手に入れたら、お前達の武器を強化してやろう。

火の時代じゃないから、よっぽど楔石が手に入ることはないだろうがな…」

コンテンツ解放:武器強化

鍛冶師アンドレイに、資金と「楔石の欠片」「楔石の大欠片」「楔石の塊」「光る楔石」「楔石の鱗」「楔石の原盤」を渡すことで、武器の威力を上げることができます。

一定の条件下で威力が特定の値に達すると、武器のアイテムレベルが上昇する場合があります。

アンドレイ

「これだけは、毎度言っている。俺が武器を鍛えたからには、生きて戻れよ」

物売りのエミリア

君達はグラスランナーの女性に話しかけた。

エクセリア

「調子はどうだ、エミリア。加入して早々、新たな《隠れ家》に来たわけだが」 エミリア

「売れ行きは上々だよ。とはいっても、普遍的なものしか売れなくて、私が仕入れる『目 玉商品』は早々売れないんだけどね」

(※GM メモ: RP 待機)

コンテンツ解放:エミリアの取引所

エミリアが製作した、特製の品物を入手することができます(代金はガメルの場合もあれば、マジテックトームストーンの場合もあります)。

マジテックトームストーンは、コンテンツの報酬の他、ガメルからの交換で入手することができます。

また、そのシナリオのクリア後限定で購入することができる「おすすめアイテム」が存在します。

スチュアート・スミス

君達は学士スチュアートに話しかけた。

スチュアート

「なんだ、まだ用があるのかい?」

エクセリア

「用事かどうかと言われたらそうだな。

こいつらをきっちり紹介してない、と感じたからね」

(※GM メモ: RP 待機)

スチュアート

「…噂の《コズミック・クェーサー・キラー》か。エクセリアが、危うく財団の《人類抹殺計画》の尖兵にされかけたところを救った英雄じゃないか。それで?私に聞きたいことがあるなら話してくれ」

PC への選択肢

- ・財団について知っていることは?
- ・エクセリアの能力について知っていることは?

スチュアート選択肢 1a: 財団について

スチュアート

「財団、か。まぁ、僕が知る限りでいいのであれば、話すとしよう」

(※GM メモ: RP 待機)

スチュアート

「財団は、魔動機文明時代後期から、現在に至るまで、このケルディオン大陸に魔動機を 作り、配り、渡してきた組織だ。

我々やヴァルマーレをはじめとする連合国。ニサベベル社会共和国やマトーン連邦をはじめとする枢軸国。ディスエリィア労働者共和国をはじめとするコミンテルン。この産同盟に対して、特に差別することなく、交易をしている。だけど、その規模に反して、関係者の情報がまるでない」

(※GM メモ: RP 待機)

スチュアート

「〈大破局〉の折には、魔動機に『時限式の房総プログラム』を仕組んでいたらしくて、 それが原因で波乱を生んだ。蛮族に付き従う魔動機があまりにも多いのは、彼らが『人類 抹殺計画』という計画を進めていたからとされている。その大まかな詳細は、君達もエル ンストから聞いたとおりだ」

「私がこのことで知っているのは、これくらいだ」

スチュアート選択肢 1b: エクセリアの能力

スチュアート

「エクセリアの能力か…。そういえば、あまり詳しく聞いてなかったね。エクセリア、差し支えがなければ説明してもらっても?」

(※GM メモ: RP 待機)

しばしの沈黙が明けると、エクセリアは前を向き、言葉を発する。

エクセリア

「そもそも、私に施された強化手術について話すとしよう。

その内容は、至ってシンプル。その身に、召喚獣イフリートを宿す…それだけなんだ。 だけど、その影響で、顕現形態…謂わば『転身』にあたる形態が失墜しているんだ。それが、神秘ではなく科学になったからね」

「そして、ミュトスとは、召喚獣イフリートをその身に宿しながら、他の召喚獣の力を扱 える、特別な存在。

召喚獣の力をどれほど酷使しようと、その身が石になり果てる事のない逸材。

アルテマが、同胞たちを蘇らせ、創世を成すために求める、『《完全生命魔法レイズ》 の発動に耐えうる肉体』を持つ者なんだ」

(※GM メモ: RP 待機)

エクセリア

「だが、彼がここで同胞たちを蘇らせたとして、やがて来る終末に抗えるとは到底思えない。だから、彼に『もう一つの未来』を…終末を退ける未来を提示した。

だから、彼から干渉されることはほぼないわけだ」

エクセリアは、己の胸に手を当てて話を進める。

エクセリア

「王たちの化身を退けた私の身は、まさに『神の器』だろうよ。

だけど、彼と私では決定的な部分で『融合』することはできない。私をアルテマの肉体にすることはできないんだ。『想い』の力によってね」

スチュアート

「語れることは尽く語ったかな。彼女の力について、私が知っていることは、彼女が話したことぐらいなものだ!

スチュアート選択肢1後

君達はそれを聞くと、踵を返してサロンへ向かうだろう。 それを見て、スチュアートはエクセリアに問いかける。

スチュアート

「…教えなくてよかったのかい?」

エクセリア

「いずれ気付くさ。

…この5年間、《暗魂の暁》は龍刻連邦の新政府を支える活動を続けていた、が…。 3年前に遭遇した、あの存在…。アレは、恐らく、アルテマが欲していた、『かつての 時代』のミュトスなのだろう…」

エクセリアは、その時の記憶を振り返る。

下半身のないヒトガタ。

青く不気味に光るその身体からは、己と同じような気配を…懐かしいとさえ感じる魔力 の奔流を感じた。

しかしそれを倒しても、それと同じ姿の異形が大量に現れた。

迫り来る1体を殴り飛ばそうとすると、急に魔力へと変じた。

そうして、現れた異形を、1体の異形がすべて取り込むと、そこに4本腕で、下半身のない異形が現れた。黒かった髪も、金色になっていた。

(※GM メモ:必要に応じて、コズミック・クェーサー・リズン VS トランスグレサー・ティフォンを演出してもよい)

エクセリア

「あいつは…『ミュトス計画』の犠牲者じゃない。生粋のミュトスなのだろう…。 だが、奴は素質が足りなかったのか…『器』ではない存在になっていたのだろう」

エクセリアは、学士の私室の窓から見える青空を見て言葉を零す。

エクセリア

「およそ 1400 年前の話だ。ここは、『財団』が始めた『ミュトス計画』のため、人工的なマザークリスタルが置かれた。アルテマが求める器…、ミュトスとは一体何なのか、それを研究するためにね。その結果、大地のエーテルは枯渇し、黒の一帯として使えない場所になった。だが、今はどうだ。1000 年の月日をかけて、大地のエーテルは再生し…、ここで、魔法を使うことだってできる。

これは、『財団』の狙う人類抹殺計画のひとつが、実行できないことを暗示しているのではないか? I

「まぁいいさ。結末を描くのは私ではない」

そう言って、エクセリアは学士の私室から立ち去った。

エクセリア

「1億 2000 万年。…あまりにも長すぎる輪廻を経て、私はこの旅路に終止符を打つ。 なぁ、ヴェーネス。お前は得たのか?星と命を巡る物語の終幕に至るための答えを」

朱く妖しく輝くその星は、既にラクシアへの落下軌道に乗っていた。

―――月の衛星、その名をロゴス。

この世界に於いて、龍刻とヴァルマーレの戦争は回避されている…だというのに、赤き 星はこの地に墜ちようとしている。

エクセリア

「これもまた、計画通りだとでもいうのか、ヴェーネス?」

―――そのとき、過去からの言葉が木霊したように感じた。

それを、君達も聞くだろう。

過去からの言霊

『世界が崩れ落ちる時にも、お前の傍にいるさ、私は』

『ワタシたちは過ぎ去ったけれど…キミは決して、独りじゃない』

『あなたが星を見上げたとき、きっとそばにいるわ』

『我らが道を拓くから…前へと、進み続けろ―――』

(※GM メモ:上から順にエメトセルク→ヒュトロダエウス→ヴェーネス→火継ぎの王たち

また、RP 待機)

君達は、過去からの言霊を胸に、傾く世界を歩み続ける。

終わりの名は希望

月の衛星と言われるロゴスの接近は、フレイディア、ヴァルマーレ双方にとって不都合なものだった。

もとより、ヴァルマーレの反戦派は、ロゴスを隕石としてケルディオンに落とす「メテオ計劃」を嫌っていた。蘆田も、そのうちのひとりだ。

だが、蘆田も、今この世界に起こっている『異変』に気付いていた。

同刻。

ヴァルマーレ首都、等護―――

イリヤ

「『財団』の奴ら、何を思ってこんな戦を!」

蘆田

「俺に聞くな!知らぬわ!

陸海空軍、総動員で、個別の幕僚長を通して指揮をしているが、正直勝ち目が見受けられんというのが本音だ!」

イリヤ

「勝ち目が見受けられなくても、人として抗うために退いたんでしょ!?」

蘆田

「ああそうだ、だからこそ、この戦の参謀を務めた!

他にやりたがる奴がいなかったからな!お前が訪れてからというもの…アカシアは襲ってくるわ、ロゴスが落下軌道に入るわ…!全く以て、碌な事がない」

兵士達が、扉を開けようとするアカシア兵の膂力に抗っているのを見たイリヤは、即座 に現状が続く時間を考える。

イリヤ

「あと 15 秒ぐらいしか持たないよ!どうするの!?」

蘆田

「敵は混成軍…アカシアと機皇帝の 100 万…この等護に置かれた兵だけでは、瞬時に制圧されるような数だ!」

イリヤ

「では、エンフロスティストゥルムも…?」

蘆田

「周辺の集落から、民兵や傭兵たちが合流して…水際で持ち堪えているらしい…! こんな局面で、傭兵を雇うことになるとは…皮肉なものだな!」

イリヤ

「それが人間だよ!みんな、生きるために腹を括っただけだ!」

蘆田

「ハッ…幼いお前が覚悟を説くとは…なぁ! 確かに、我々に足りなかったものだ…よぉ!」

その水際の防衛戦線も、遂に突破される。

兵達が次々に討たれ、残るは蘆田とイリヤのみ。

イリヤ

「数が多い!蘆田さん、手は打ってあるでしょうね!?」

蘆田

「打ってはあるが、それが確実になるとは限らんぞ!どうする!?」

イリヤ

「それでも足りないなら、無礼を承知で頼むけど…部隊をいくつか貸してほしい!どうしても、あの人の力になりたいの!」

蘆田

「まさか、エクセリアか!?

二つ返事で頷いてもいいが、どこにどの兵がどれほどいるのかさえ、情報が伝わってこない状況だ!この状況がどうにかならんと、手が回らん!」

イリヤ

「少しだけでもいい…!今も戦い続けているエクセリアさんのためにも、少しでも力を貸してあげなきゃ…!」

蘆田

「だがゼーゲブレヒト!兵を送ったところで、機皇帝とアカシアを従える『財団』にはとても――― |

アカシアの攻撃を凌ぐ蘆田とイリヤ。 そこへ、バイクの音が鳴り響く。

不動遊星

「ならばその任、俺達が就こう」

ダイナミックエントリーをして、スターダスト・アサルト・ウォリアーで付近のアカシアを一掃した遊星は、イリヤに向けて告げる。

不動遊星

「チーム 5D's の面々と、その知己を預ける。

全員、歴戦の<ruby>決闘者<rt>デュエリスト</ruby>だよ」

世界に、確実に混沌が巡ってきていた。

<hr>

同刻、エクセリア達の隠れ家。

君達は、エメリーヌに呼ばれていた。

エメリーヌ

「リーンを、ヴァルマーレに向かわせたわ。あそこには、ドラゴンという強大な抑止力がないの。『場合によっては、セイヴァーアーマーに拘らずに戦いなさい』と、彼女に伝えてあるわし

(※GM メモ: RP 待機)

エメリーヌ

「…財団との決戦は、ドルニオン平原とのことよ。

…あなた達とは別に、冒険者部隊がいるけれど、どれほど戦えるか…。

頼んだわよ。どうか…この世界を護って」

時代の終焉

君達は、ドルニオン平原に現れた『財団』の手勢を相手取っていた。

敵:機皇帝ワイゼル∞ ×4

機皇帝を倒すと、そこへ、黒い魔動機が現れる。

財団

「君達も飽きないね。世界の破滅を、何の干渉もせずに見届ければ良かったものを」

『財団』の声は、その黒い魔動機から発せられていた。

財団

「まぁいい。探す手間が省けた、と考えるとしよう。

君達には、今、ここで滅んでもらうよ。確実に…絶対にね。そして、この世界に巣食う 偽りの神々に、この世界の真実を…『世界を破滅させるのは人間自身』だと、示すんだ」

敵:"殲滅機構"オールバニッシャー・プロト

(※GM メモ:3 ラウンド経過+アルテマ詠唱完了で戦闘終了)

財団

「ハハハ!やはり、貴様らは弱い!

破滅の言の葉よ、あらゆるすべてを焼き払え!《アルテマ》!」

その魔法の、発動の刹那。聞き馴染んだ炎の音が、その戦場に轟いた。

財団

「…なに…?」

アルテマ

『貴様の破滅願望を、世界に伝えるわけにはいかんのでな』

エクセリア

「ああ、そうだ。だから…お前を、止めに来た」

(※GM メモ:瀕死の RP 待機)

財団

「ミュトスが、人々の希望となるか。ならば、その希望をへし折ることで、世界に破滅を 齎してやるとしよう…!」

財団の機体、その人差し指が天を示す。

そこには、衝突回避ができないほどに接近した、月の衛星ロゴスの存在があった。

財団

「さぁ、ロゴスよ!その真なる姿で、人々の想いを破壊し、その業火で世界を潰せ!」

ロゴスが砕け散る。

そこに現れたのは―――禁忌と言われる黒龍―――

エクセリア

「…『黒龍ミラボレアス』か。予想できないとでも思ったのか?」

財団

「無論、予想できるだろうさ。なにせ貴様は、人々の想いを束ねて、《ロゴス》に至って いるのだから」

(※GM メモ: 瀕死の RP 待機)

財団

「だが、ロゴスにミラボレアスは撃ち払えない」

財団はそう言って、黒龍ミラボレアスに、君達を焼き払うように命じる。

エクセリア

「お前の命、それ一つを奪うくらいなら…造作もないことだ。 なにせ私は…《始原の十四席》なのだからな…!」

炎の柱が、そこに立つ。

その炎の柱の中から現れたるは…『宙準星の竜』。それも…、半ば投げやりに、大量に 現れた『幻影の魔星』を撃退した姿の。

エクセリア

『これなら、ソイツと同じ領域だ』

財団

「へぇ。君は、そうまでして、『人の味方』をするんだ。 君はもはや人ではなく、ドミナントなのに」

エクセリア

『それは、私が決めることではない。この理不尽な霊災を、とっとと終わらせる。 いずれにせよ、私はもう二度と、世界をやり直すことはできない。

絶望のリセットではなく、希望のコンティニューで…私さえも経験したことのない、果てなき未来へ、その足で進むために。そして、後から続く者達の道を、切り拓くために。 私は今までの世界で、想いを託された。そして、繰り返しの中で捨て去った…倒れてい

『この力は―――天を創る力だァァァ!!』

ったものの願いと、後から続くものの希望に、応えたい』

空を照らす災禍の炎を切り裂くように。

振るわれた一閃は、ミラボレアスを―――たった一撃で、神核を含めて破壊した。 否、それだけではない。

1 億 2000 万年分の因果、それが結実するかのように―――オールバニッシャー・プロトの身体を破壊した。

財団

「馬鹿な…!?こんなことは…!」

アルテマ

『彼女の歩みを…、祝福無き者としての、元来の力を使い果たすまで戦い続けた、彼女を中心にして廻る因果を、舐めたようだな』

エクセリア

『お前は…ここで確実に仕留める!暫くの間、お前の行動を封じるためにな…!』

エクセリアはそう言い放ち、オールバニッシャー・プロトを破壊した。

薄れゆく君達の意識の最中でも、エクセリアが新生の炎を放ち、黒龍ミラボレアスから 散らばった魔力を新生のためのリソースに書き換え―――第七霊災は、封印魔法もなく終 結した。

だが、霊災が…次元圧壊という災厄が起こったことに違いはない。

時を飛ばすことがなかったからか、その戦場に「『光の戦士がいた』という認識」が、「『冒険者がいた』という認識」へと書き換えられただけに過ぎない。

結局のところ、〈大破局〉の終焉を境に始まった《第六星暦》とでもいうべき時代が、 この災厄によって終わりを迎えた…ただそれだけだった。

毀れた世界の灯

《ドルニオンの戦い》と呼ばれた、財団と連合軍の戦いから、4週間。その日を境に、 『財団』は沈黙。しかし、『財団』製と思しい魔動機が、度々龍刻連邦を襲撃した。 エクセリアは、先の戦いでの無理が祟り、またしても石化が進行していた。

それは、壊れゆく世界を示したものか、それとも責務不履行による、《祝福無き者》の 頭目からの罰か。答えは出ない。

ただ、ひとつだけ言えることはある。

これは、「エクセリアの追想」という物語の最終章である、ということだ。

報酬

経験点

·基本:4000点

・メテオサバイバー:4000 点

資金

·基本:3000G

・メテオサバイバー:4000G

名誉点

·基本:200点

成長回数

·基本:17回